

散佚歴史物語『弥世継』の研究

福田景道

要旨 『増鏡』において、『弥世継』は、『栄花物語』と四鏡を中心とする正統歴史物語の系列を成り立たせる作品として重視されている。しかし、実はそれは異なり、王朝的『世継三作』（『栄花』『大鏡』『今鏡』）の類縁作品であったと考えられる。現在の『弥世継』理解は、『増鏡』によって再編成された一直線状（直列型）の歴史物語系列に基づくものであるが、近世には二様の享受方法が確認できる。歴史物語系列の完備を目的とする外観的享受と平易な日本通史の習得を目的とする内実的享受である。前者は「十語五草」に象徴され、標題のみの『弥世継』を生み出した可能性がある。後者は荒木田麗女による歴史物語『月のゆくへ』創作を促したと思われる。このような、『弥世継』理解の変転は歴史物語全史の展開に關与するものとして重要である。

【キーワード】 弥世継、増鏡、歴史物語、歴史叙述、世継、鏡物、散佚

一 連結する歴史物語

文学史上の歴史物語の本質や範囲は、必ずしも明らかではない。私見では、歴史物語に共通する性質として、基層に皇位継承史構想を内在させること、外周に枠物語形式が顕在化する傾向があることを挙げ得るが、これに基づいて、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『秋津島物語』『六代勝事記』『五代帝王物語』『増鏡』『梅松論』『保曆間記』『神明鏡』を純正歴史物語とし、江戸時代成立の『月のゆくへ』『池の藻屑』を擬古的歴史物語と位置づけることができる。『唐鏡』『源威集』『愚管抄』『神皇正統記』などを隣接作品、疑似的歴史物語として周辺に位置づけることも可能であろう。²⁾

一方、一九二〇年代以来、百年近く、『栄花物語』と四鏡を中心とする八作品を正統な歴史物語と見なす見解が通用している。³⁾ 『栄花』『大鏡』『今鏡』『水鏡』『増鏡』に新発見の『秋津島物語』と後出の『池の藻屑』『月のゆくへ』を加えた八作品を特立させるのが一般的である。これは、言うまでもなく、『秋津島物語』―『水鏡』―『大鏡』―『栄花』―『今鏡』―『月のゆく

へ』―『増鏡』―『池の藻屑』と連ねることにより、神代から後陽成朝までの日本通史が完成する事実⁴⁾に依拠する統括方法である。作品の形状からは神代からの叙述とは断定できない『秋津島物語』や、成立した時代相に伴って異質性の顕著な『池の藻屑』と『月のゆくへ』が、それにもかかわらず正統視されるのは、偏にこの連続性に基づく。⁵⁾

各作品が対象化する歴史（期間）が連続する「仮名文の歴史叙述」としては統括できるが、同時に各作品の個性には異質性が認められる点から、「歴史物語」を「ジャンルの呼称ではなく、作品を越えて連環体をなす歴史編述」と捉える立場もある。⁶⁾

以上のように、各作品の歴史叙述期間の連続性が「歴史物語」という作品群認識の根拠となり、一貫した日本全史を完成させる一点によって、今日まで八作品が歴史物語の中心を占め続けてきたと見なして大過ないであろう。⁷⁾

このように理解され、享受されるようになった契機の一つに、『増鏡』の序文に展開される歴史物語史総括記事がある。

いさ。たゞおろく見及びし物どもは、水鏡といふにや。神武天皇の

御代より、いとあら、かにしるせり。かの次には、大鏡、文徳のいにしへより、後一条の御門まで侍りしにや。又世継とか、四十帖の草子にて、延喜より堀川の先帝まではすこし細やかなめる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍し今鏡に、後一条より高倉の院までありしなめり。まことや、いや世継は、隆信朝臣の、後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたるとぞ見え侍りし。その後の事なん、いとおほつかなくなりけり。⁸⁾

(二四九頁)

この簡明にして達意な列挙記事と近代の歴史物語把握とは符合するのである。現行の文学史の記述は、『増鏡』に極めて近似する。⁹⁾

ここで注目されるのが散佚『弥世継』である。『増鏡』時代に伝存して現在失われている唯一の作品である。『増鏡』によって、藤原隆信が著作した後鳥羽帝の在位時代までの歴史叙述『弥世継』がかつて存在していたことが判明する。もしも散佚していなければ、『栄花物語』や四鏡と並ぶ第六の正統歴史物語であったはずであり、『水鏡』—『大鏡』—『今鏡』—『弥世継』—『増鏡』と連結して完全な通史を成り立たせて「五鏡」を形成させていたことであろう。

その散佚によって図らずも生じた通史の空白部分を補填するために『月のゆくへ』著作が敢行されたことから、『弥世継』が果たした役割、存在感の大きさがうかがえる。なお、『池の藻屑』は『増鏡』以降の時代を対象とし、通史を延長したと考えられているが、同時代を扱う『続増鏡』『弥増鏡』が先に存在していた可能性も指摘されており、その場合は、『池の藻屑』も『月のゆくへ』と同様に通史の欠落を近世に補ったものとも言える。

すなわち、近世以前には鏡物相当作品がさらに一〜三作存在していて、間断のない通史の系列が完成されていたという仮説が成り立つ。そのなかで、『弥世継』は、その対象時代から見て、作品系脈の中枢に位置する重要作品であったと思われる。散佚が通史の連続的享受を瓦解させるからである。

二 『弥世継』の歴史叙述

『増鏡』の序文から知られる『弥世継』の内実は、作者が藤原隆信である

こと以外には、「後鳥羽院の位の御ほどまでをしるしたる」と歴史叙述の最後尾が後鳥羽帝在位期間であるとする部分のみである。

これを根拠にして、『増鏡』の歴史世界は後鳥羽朝を起点として展開する。後鳥羽朝の次の時代からではない。このような姿勢は『今鏡』の方針を忠実に踏襲した結果と考えられる。『今鏡』は、後一条帝在位の万寿二年(一〇二五)までを収める『大鏡』を受け継ぎつつ、「かの後一条の帝、世を保たせ給ふ事二十年おはしまししかば、万寿二年の後、いま十かへりの春秋は残り侍らむ」(三三頁)と明示した後に、出自・誕生・立坊・即位・治世など後一条帝時代全体を叙述の対象に含める。『大鏡』の最終時点と重複しつつ『今鏡』の歴史叙述は起動する。これに倣って、『増鏡』も後鳥羽院の一代記(「帝紀」)を劈頭に掲げるのである。『大鏡』と『今鏡』が後一条朝を重複させると同様に、『弥世継』と『増鏡』とに後鳥羽朝が重出するという相似的構図が認められる。『弥世継』が正統歴史物語である限りは、『増鏡』との接続はこのように想定すべきであろう。

そうすると、『弥世継』の歴史叙述の始発点は、高倉帝の治世と見なすのが至当である。『増鏡』序文に記載はないけれども、各作品の連続性を重視することを前提に『今鏡』と『増鏡』の間に生じる空白期間を『弥世継』が満たしていると考えるほかはないであろう。加納重文は、歴史物語各作品の継承性を重視した上で、『弥世継』の収録範囲を「高倉帝嘉応二年(一一七〇)〜後鳥羽帝寿永二年(一一八三)」と推断する。¹³⁾ 同様の見方は少なくない。¹⁴⁾ 和田英松も「安徳天皇より、後鳥羽天皇に至る仮名文の歴史なり。今鏡のあとをついで書きたるものなれば、続世継の続篇といふ意なるべし」と、高倉朝の次の安徳朝からの歴史物語と判定する。高倉朝の重複を想定しない点に小異があるが、『今鏡』と『増鏡』の間隙を埋める作品という理解は通例に一致する。

こうして散佚『弥世継』をはめ込むことによって、『水鏡』(または『秋津鳥物語』)から『増鏡』までの完全な通史的歴史叙述が、中世には成立していたと考えられるのである。これは自明のことではあるが、現在の一般的な理解として敢えて確認しておきたい。なぜなら、このように考えた場合に一点の不自然さが生じるからである。

不自然さとは、『弥世継』だけが異様に短い期間を対象とする点である。加納説に従って嘉応二年（一一七〇）〜寿永二年（一一八三）の叙述とすると僅か十四年、和田説の安徳朝から後鳥羽朝によっても二十年に満たない。仮に高倉帝の踐祚時点（仁安三年（一一六八））から後鳥羽帝讓位（建久九年（一一九八））までと最大限に見積もっても約三十年間にしかならない。極端に短い期間を扱う例外的な歴史物語だったということになる。他の鏡物系歴史物語が百年以上を対象とし、それに相応しい超人的な語り手を造型するのに相反して、『弥世継』の語り手に超越的な長寿も神秘的な記憶力も必要ない。この点からは、四鏡と同類の作品とは言い得ず、歴史物語の範疇にも入れ難いのである。

『弥世継』が正統な歴史物語であるためには、やはり非現実的な寿命をもつ靈妙な語り手が、常人には不可能な長期間を物語るという設定が不可欠なのではないだろうか。そうすると「後鳥羽院の位の御ほどまでをしよう」と明記されているので最終時点は動かし難く、始発時点のみを再考せざるを得ない。すなわち、『弥世継』の歴史叙述は高倉帝時代のはるか以前から始まり、かなりの期間が『今鏡』と重複していた可能性が高いと考えられるのである。『増鏡』の記述において、『弥世継』は後鳥羽院起筆の必然性を提供する点が最重要であって、現存鏡物系列の間隙を過不足なく補填することの重要度は高くはなかったという推測も成り立つ。

『増鏡』に『弥世継』の起点が示されない不自然さもこの推測を支持するように思われる。他のすべての作品（『水鏡』『大鏡』『栄花物語』『今鏡』）において歴史の始点と終点が明記されているのに、『弥世継』についてだけ始点への言及が見られないからである。

また、『増鏡』序文において『栄花物語』の対象期間が他の作品のそれとは重複している点も軽視できない。たしかに『水鏡』・『大鏡』・『今鏡』・『増鏡』に重複期間はほとんど認められず、一連の歴史叙述が確立していると思し得るが、『栄花物語』（「世継」）四十巻の対象期間は『大鏡』・『今鏡』と完全に重複している。

すなわち、『増鏡』序文に基づいて、図1のような一直線状（直列型）の歴史物語系列があるものと一般に理解されているようであるが、それと同程

度に、図2のような平行線状（並列型）の系列存在の可能性も認められるのである。両者の優劣は決し難い。

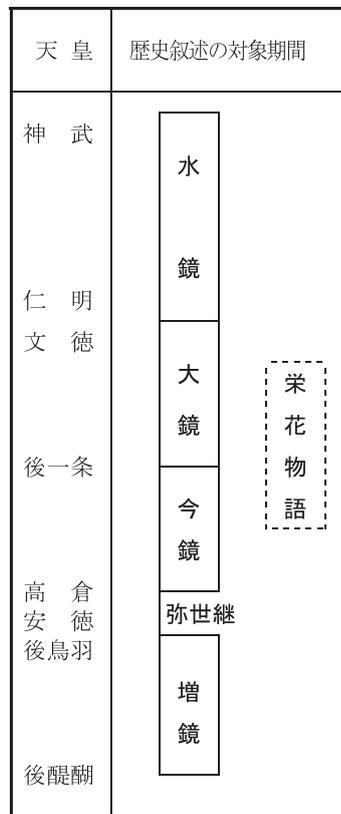


図1 『増鏡』に基づく系列1

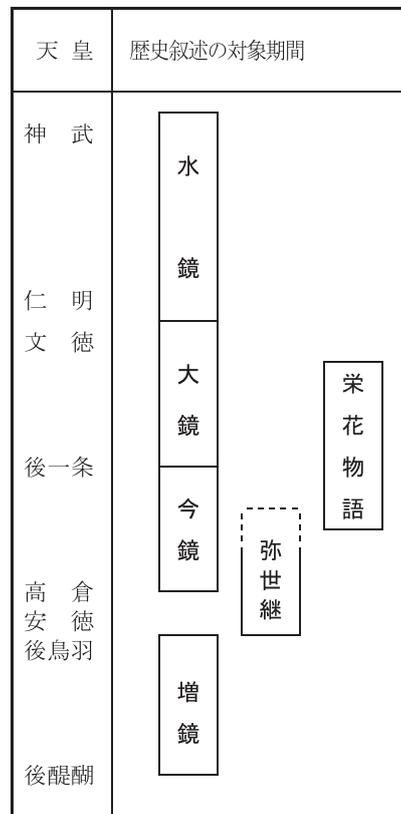


図2 『増鏡』に基づく系列2

それにもかかわらず、通常は一直線状にしか理解されていないのは、『増鏡』当該箇所が後鳥羽院起筆の根拠を提示するためにあるからに違いない。一直線状の歴史物語系列が後鳥羽院在位時で杜絶している状況を踏まえて、その不完全さを解消するために後鳥羽院以降に叙述を延長するのが『増鏡』であると宣言されている。これを尊重するなら、『増鏡』の後鳥羽院起筆は、歴史物語史完成を大義として必然性を帯びる。一方、『栄花物語』や『弥世継』の対象期間が『大鏡』や『今鏡』と重複する平行系列を認めるなら、『増鏡』

起筆時点の必然性は霧消するであろう。

このような見方は、『増鏡』の歴史構想に着目すると、さらに蓋然性を増す。作品としての『増鏡』の完成度の高さは、隠岐配流という共通体験をもつ後鳥羽院と後醍醐帝を首尾に配することによって成し遂げられたと思われる。その主題については説が分かれるが、後鳥羽と後醍醐の境遇や人格を同一視することに依拠して一作品としての統一性が保持できていると言えるからである。統一性のためにも後鳥羽院起筆は有効なのである。もしも『弥世継』が存在しなければ、『増鏡』は『今鏡』に直続せざるを得ず、始点は高倉院になり、首尾の照応は失われるに違いない。

さらに言えば、『増鏡』序文に掲出される歴史物語列挙記事そのものに作為性が見いだせる。『栄花物語』と鏡物が一括されて、その後継者に『増鏡』が位置づけられているのであるが、他にも同類と見なせる作品が数点現存しており、それらを視界に入れると、まったく別様の歴史物語系列が現出するからである。

まず、『今鏡』で対象とされた年代を受け継ぐ歴史物語として、『六代勝事記』が挙げられる。高倉帝から後堀河帝までの六代の歴史叙述を形象しているので、『増鏡』に先行して『今鏡』の統編的役割を果たしていたと考えられる。さらに後堀河帝から龜山帝に至る五代を扱う『五代帝王物語』が明らかに『六代勝事記』を直接継承する。このように『増鏡』成立の前に、『今鏡』―『六代勝事記』―『五代帝王物語』という連鎖関係が存在していたのである。¹⁷『六代』『五代』ともに五十年余りの短い歴史叙述であるが、『今鏡』と『増鏡』の間隙を埋めるのみの作品と想定した場合の『弥世継』よりもはるかに長い。高倉朝の記事が『今鏡』と『六代』に重出し、後堀河朝が『六代』と『五代』に併存する点は、『大鏡』と『今鏡』との接続方式に等しく、正統な継承関係が維持されていると言える。『今鏡』を受け継ぐ歴史叙述の系列は『増鏡』以前に存在していたのは明らかである。

また、『増鏡』との先後が決し難い歴史叙述に『梅松論』『保暦間記』『神明鏡』などがあるが、これらが先行して成立していたとすれば、一直線状の歴史叙述の認定がさらに困難になる。『秋津島物語』には『水鏡』以下と重複していた可能性が指摘できるので、¹⁸ここにも並行系列が成り立ち得る。

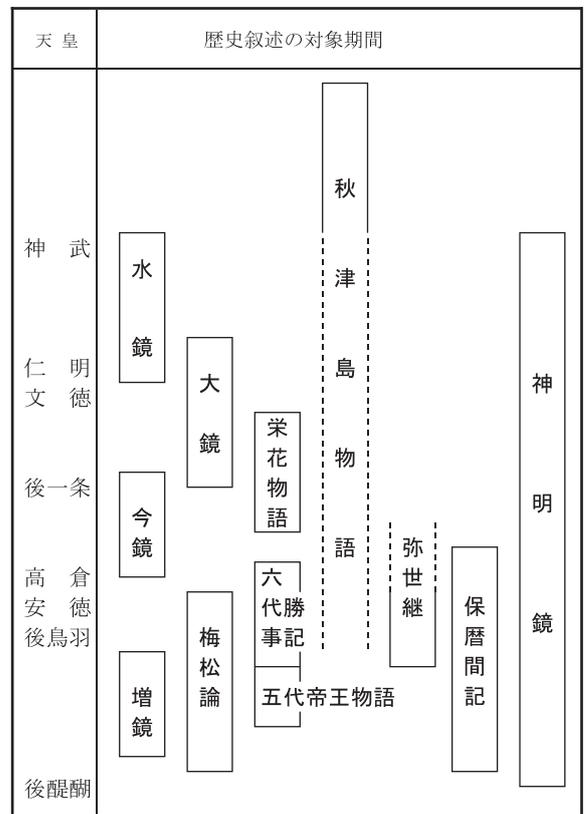


図3 『増鏡』に拠らない歴史物系列

したがって、『増鏡』の主張に反して、図3のような分散型の歴史物語系列の存在が見いだせるのである。これに『愚管抄』『神皇正統記』のような史論書や軍記文学に含まれる歴史叙述部分を加えることもできる。関連作品として『唐鏡』『無名草子』『宝物集』などを周辺に配置してもよいかもしれない。これが現実になかったと思われる。

『増鏡』は、このような歴史物語諸作品の多彩な分布を遮蔽して、『栄花物語』と四鏡のみを選択して単純な一直線状に系列化したのである(図1)。¹⁹『大鏡』に発する鏡物の流れを独占的に受け継ぎ、『栄花物語』に代表される王朝の伝統を正式に継受することを証明するための作為であったとも考えられる。同時に作品としての統一性を保持するために後鳥羽院起筆が不可欠であり、そのために『今鏡』の直後に『弥世継』を介在させなければならなかったと推断できる。その結果、後鳥羽院と後醍醐帝によって王朝社会や王朝国家が再生され、王朝時代に復古する壮大な物語が形成できたのである。それに伴って、『栄花物語』と四鏡を中心とする歴史物語観が導き出され、散佚『弥世継』もそれに寄与し、今日まで継続する通識になったと言っても大過ない

であろう。

三 「世継」としての『弥世継』

次に、『弥世継』の書名が問題になる。なぜ「〇〇鏡」ではなかったのであろうか。『栄花物語』や『大鏡』が「世継(物語)」と別称され、『今鏡』の別名が「統世継」であったことはよく知られている。この命名を踏襲したとは言える。「いや」は「いやまし(弥増)」の意で、「弥世継」は「統世継」の続編を意味すると考えられている。しかし、密接な関係が予想される『増鏡』には「〇〇世継」と呼ばれた痕跡が見いだし難く、「鏡」と「世継」、鏡物と世継の物語とは同義ではないように思われる。そこで、『弥世継』が「世継」である点に注目する。

歴史物語全作品中、明確に「世継」の呼称をもつのは、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の先行三作品である。『増鏡』や『本朝書籍目録』では『栄花物語』は「世継」と呼ばれる。『栄花物語』の最善本とされる「梅沢本」十七帖の後半七帖には「世継」という題名が付されている。『讃岐典侍日記』『袋草紙』『袖中抄』などには、『栄花物語』が「世継」と呼ばれたと見て矛盾しない記述がある。大宅世継が語る『大鏡』は間違いなく「世継(の)物語」である。「世継」「世継物語」と題される写本も確認できる。『栄花物語』と『大鏡』はともに「世継」「世継物語」であり、その両者の続編として成立したのが『今鏡』である。『今鏡』の現存写本の過半数が「統世継」の標題をもち、最も原形に近いと見られる畠山本の内題には「新世継」と記されている。「統世継物語」「統与継」という書名が与えられる場合もある。『今鏡』はかつては「鏡」であるよりも「世継」と理解されていたと思われる。

このように、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の三作品は「世継」性を強くもち、「世継(物語)」として一括されていたのである。一方、『水鏡』には「世継」を含む別称は見られない。『唐鏡』『秋津島物語』『六代勝事記』『保曆間記』などが「世継」と呼ばれた形跡はない。『五代帝王物語』の冒頭には「神代より代々の君の目出き御事どもは、国史・世継家々の記に委く見えて」と「世継」との関連性が示されるが、『五代帝王物語』そのものを「世継」と同一

視してはいない。むしろ正史(「国史」)・「家々の記」(「日記」)と同列に「世継」を位置づけて自著との異質性を明確化しているように思われる。このように、歴史物語の中で『栄花物語』・『大鏡』・『今鏡』だけが特に「世継」と呼ばれていたことになる。²²⁾

別稿に論じたが、この三作品(「世継三作」と仮称する)とその他の歴史物語的作品との間にはいくつかの相違点が指摘できる。たとえば、世継三作が長編で叙述が詳細なのに対して、他の作品は短く、簡略・平易にまとめられている。『増鏡』の序文に『栄花物語』が「細やか」と、『水鏡』が「あららか」と形容されていたのもこれと照応する。文体も、王朝的な和文体を基本とする三作と、漢文訓読体的な傾向の他作品とに二分できる。成立時期も、世継三作が明らかに先行している。先行三作の語り手が血縁をもつものと造型され、相互に補充・類縁性を顕現するのに対して、『水鏡』以下の後続作品にそれがほとんど見られないことはすでに述べた。²⁴⁾ 中世になり、歴史物語の読者層が拡大し、読書の目的も変化したことの反映である点も考慮しなければならぬが、歴史物語に類する作品は、「世継」と非「世継」とに大別できるのである。

『弥世継』は、書名から見ると世継三作に近く、大宅世継の系統に属する神秘的な語り手が設定されていたと推定される。第四の世継であることは動かし難いが、一方、二巻という巻数の少なさからは中世以降の短編の歴史叙述に近かったとも考えられる。これらの点から見て、『弥世継』は正統世継物語から中世の新歴史物語への推移に関わって、歴史物語史展開の要因を知る上できわめて重要な作品であったかもしれない。いずれにしても、古代と中世の分岐点、新旧の歴史物語の境界に立つ点は看過できない。

『増鏡』では、『弥世継』の作者が藤原隆信とされている。その父藤原為経(寂超)が『今鏡』の作者として有力視されているので軽視できないが、作品本体が散佚しているので確認を得ることは難しい。²⁷⁾ 隆信の作であることを前提に『弥世継』を考察することは本稿では差し控えたい。ただし、仮に隆信の著作とすれば、元久二年(一一〇五)に六十四歳で没しているので、『今鏡』の後、『水鏡』と同時期の成立と見なすのが妥当であろう。そうであれば、先行「世継」の最後尾、中世歴史物語の直前に位置すると見なして齟齬はない。

四 近世の『弥世継』

中世においては、『増鏡』と『本朝書籍目録』のみによって存在が知られる散佚『弥世継』であるが、江戸時代になると、その名がしばしば見いだせるようになる。

まず、黒川道祐(元禄四年へ一六九一没)の『遠碧軒記』(延宝三年へ一六七五の序あり)下之二「典籍」の部にある歴史物語諸作品を概括する記事が注目される。

○水鏡〔割註〕神武、仁明。大鏡〔割註〕自「文徳」至「後一条」、号「世継」。作者藤原為業、法名寂念。

又世継〔割註〕自「延喜」至「堀川」。作者赤染衛門。又世継四十帖と云は栄花物語なり。

今鏡〔割註〕自「後一条」至「高倉」。作者某大臣、如何、統世継とも云ふ。弥世継〔割註〕自「後鳥羽」至「後醍醐院」。後成恩寺兼良公男妙華寺冬良作。²⁸⁾

『水鏡』・『大鏡』(号世継)・『世継』(栄花物語)・『今鏡』(統世継)という歴史物語四作品とその別称が列挙され、最後に『弥世継』の名が明記されている。「弥世継」部分の割注には、後鳥羽院から後醍醐帝までを対象とすること、一条兼良の息男冬良が作者であることが説明されていて、異彩を放つ。作品列挙と割注の歴史叙述対象期間の部分は、『増鏡』序文の記述に追隨していると言つてよく、『大鏡』や『栄花物語』などの作者記事は、『本朝書籍目録』や『日本紀私抄』などに指摘されているもので珍しくはない。一方、『弥世継』の割注にある対象期間と作者記事は異例であるが、「自後鳥羽至後醍醐院」は『増鏡』の対象期間にほかならず、一条冬良は、『続本朝通鑑』『東見記』『安斎隨筆』などに見られる古くからの『増鏡』作者の候補である。

つまり、『遠碧軒記』の「弥世継」に付された割注は『増鏡』のもの竊入であったと理解できる。単に『増鏡』を「弥世継」と誤記したか、『弥世継』の直後に脱文があると判断すべきであろうが、いずれにしても「弥世継」が『増鏡』の別称であった可能性も絶無ではないであろう。

多田義俊(寛延三年へ一七五〇没)の『秋斎問語』(宝暦三年へ一七五三刊)にも『弥世継』が記される。嫁入りの必携品に相応しい十五の物語・随筆・記録が「十語五草」としてまとめられている中に「弥世継」が含まれるのである。このうち「十語」には、

竹取物語 うつほ物語 世つぎ物語 いや世つき物語 續世つき物語²⁹⁾

鏡共云 ます鏡 榮花物語 狭衣 水鏡 伊勢物語

已上を十語と云。³⁰⁾

と、歴史物語六作品が含まれる。「統世継」を『大鏡』の別名と誤るなど本文の信頼性に欠ける面があるが、「いや世つき物語」と明記されているのは注目に値する。十語五草は嫁入りの際に持参し、「飾り棚」に設置すべきものであったらしいので、『秋斎問語』刊行の十八世紀半ばまでは『弥世継』が存在していた証拠になると考えられる。また、この時期に『栄花物語』や四鏡と比肩するほどに『弥世継』が嫁入り本として珍重されていたとすれば、ある程度の写本が生成されたに違いない。「弥世継」を欠く場合、歴史物語の連続性が遮断されることになり、嫁入りの瑕疵にもなりかねないからである。

しかし、『秋斎問語』刊行後まもなく『弥世継』は散佚していたと考えざるを得ない徴証がある。明和八年(一七七二)、荒木田麗女によって、『今鏡』と『増鏡』の間隙の欠落を埋めるために『月のゆくへ』が執筆されたからである。作品内の序には、

いや世継といふなる書のありと聞き侍れば、見まほしくて、年頃もとめわたりぬれど、世にあまたもなきにや、今にえ見侍らず(七頁)³¹⁾

いや世継の草紙の、見まくほしさのせむ方なき儘に(八頁)

と『弥世継』の亡失が明言されている。これは作品執筆の動機であるので、信頼度の高い文言と見なせるであろう。巻頭に配された野村東草³²⁾による序文にも『弥世継』散佚が暗示されている。この事実こそが『月のゆくへ』著作の原動力となったのである。ただし、この作品は嫁入り本の完備のためではなく、王朝の鏡物の連続と持続を目指して著作されたように思われる。³³⁾『秋斎問語』などの方向性とは整合しない。

ところで、『秋斎問語』刊行時(一七五三年)に『弥世継』は本当に実在

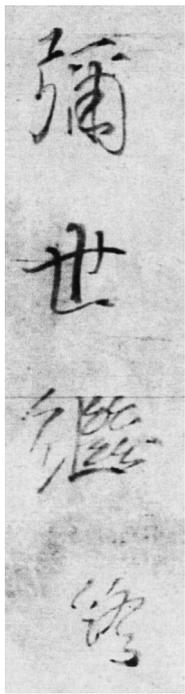


図4
高山本『増鏡』
第三冊題字

したのであるうか。享保十七年(一七三二)生まれの文献渉猟家荒木田麗女が遂に捜し当てることのできなかつた事実からは、もっと早くから散佚していたとも想像される。黒川道祐や多田義俊が実際に『弥世継』を見ていたとは限らない。『増鏡』の序文などの先行諸書によるだけで、右の一節を記すことは難しくないからである。

『遠碧軒記』や『秋斎問語』に見られる『弥世継』は、歴史物語の連続を完全なものにするためには欠くことのできない作品であった。『増鏡』によって再編成された一直線状(直列型)の歴史物語系列を保持するのに寄与していたと思われる。しかし、それは表面的な連続に主眼があつたと言わざるを得ず、実態としての『弥世継』の存在に関心をもたれたとは考えられない。江戸時代の『弥世継』の残存に疑義が生じることを禁じ得ない。一方、世継系歴史物語の系譜と仮名文による日本通史の持続を実質的に企図する動きもたしかにあった。荒木田麗女の『月のゆくへ』などの創作である。そこには王朝歴史物語の再現だけでなく、内容上の通史の完成、史書の編纂が志向されていたと推定される。その段階で『弥世継』の存在が確認できていないことからは、少なくとも十八世紀中葉には『弥世継』は散佚していたという推定が導き出される。

五 現存する「弥世継」

ところが、「弥世継」の表題をもつ写本が現存する。飛騨高山まちの博物館(旧高山郷土館)所蔵の三巻本『増鏡』である(以下、「高山本『増鏡』」と略称)。实体は『増鏡』であるが、三冊の表紙にそれぞれ「いやよつき始」「弥世継中」「彌世継終」と題名が直接書かれている(図4)。なぜ『増鏡』に「弥世継」という標題が付けられたかは判然としない。田中大秀(安永六年

一七七七)弘化四年(一八四七)の旧蔵本であるが、題名が書かれた時期は不明である。いずれにしても、「弥世継」と呼ばれる書物が存在することだけは間違いない。³⁶⁾

この「弥世継」が『弥世継』でないことは早くから知られていた。³⁷⁾しかしながら、これは、『遠碧軒記』の表現に合致するとは考えられないであろうか。書名は『弥世継』で内容は『増鏡』であるこの文献をそのままに紹介すると、『遠碧軒記』のような形にしなければならないからである。

また、「弥世継」と題される『増鏡』の存在は、「弥世継」が『増鏡』の別称であった可能性を示唆している。成立時期の大きな隔たりから、世継三作と『増鏡』との間には性格上の相違を認めなければならぬが、外形・内実ともに近接する側面が存することも否定できない。簡明で漢文訓読文体を基本とする中世歴史物語の時代にあつて、例外的に王朝時代への復古を志向して王朝的仮名文体で詳細な歴史叙述を展開する『増鏡』は、最も世継三作に近い作品であつたと見なして大過ないであろう。

このように考えると、『増鏡』を四番目の「世継(物語)」と認定して、「続々世継」の意で「弥世継」と呼称する享受者が存在していたという仮説も成り立たないわけではない。嫁入り本として十語五草の外観上の完備を主目的として『弥世継』を探索する場合、「弥世継」を表題とする『増鏡』が図らずも要をなした可能性も皆無とは言い切れない。江戸時代に存在していた『弥世継』には、飛騨高山に現存する『増鏡』の一本のように表紙のみの「弥世継」が含まれていたのかもしれないのである。近世における『弥世継』の伝存は、さらに疑わしくなる。

この高山本『増鏡』からは、注目すべき点がもう一点見いだせる。第一冊の表紙裏の貼紙に見られる一頁分相当の記述である(図5)。

水鏡は神武より大鏡文徳より一条まで又世継とか四十帖諸花物語

延喜より堀川先帝まで今鏡後一条よりいや世継後鳥羽院

後鳥羽院高倉御宇諱尊成御母七条院殖子左大臣信隆女

と、『増鏡』の序文とほぼ同文があり、「世継(歴史物語)」の系列が再確認され、重視されている。次行の

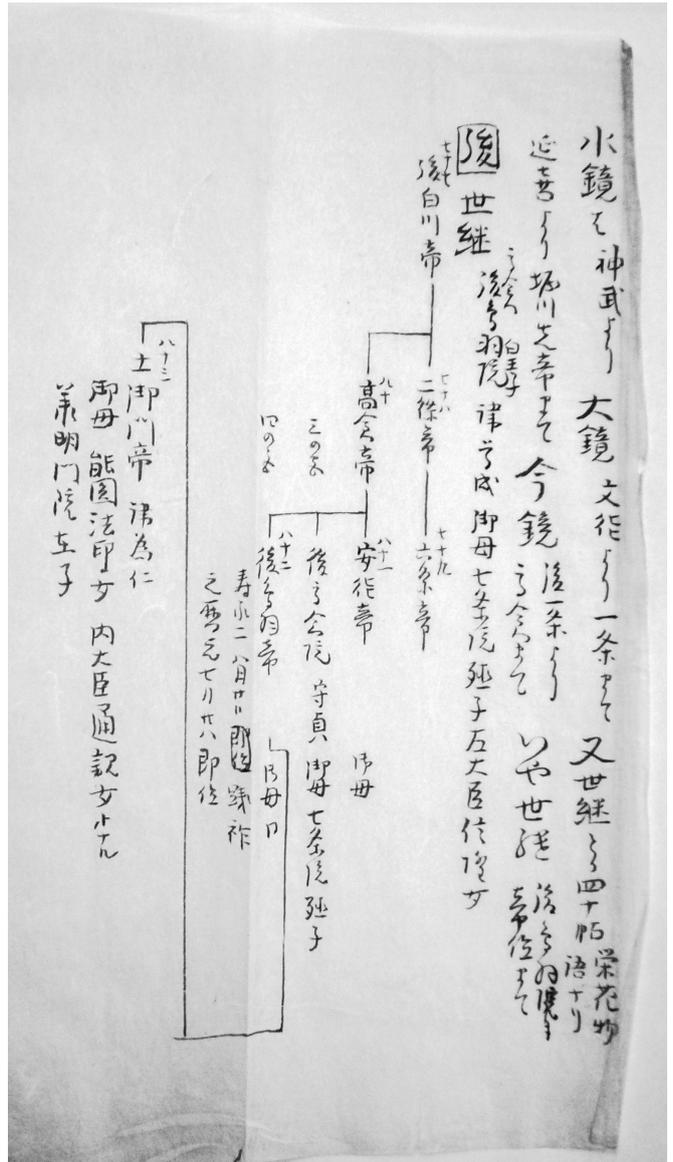
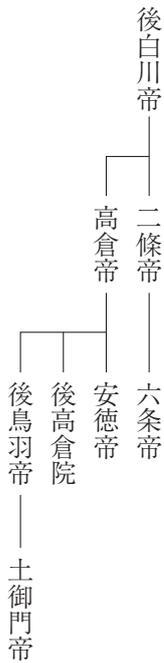


図5 高山本『増鏡（弥世継）』貼紙

に続いて「後世継」と大きく記された後に、現行『増鏡』本文の範囲を超えた系図が描かれる。



この系図に付記・挿入されている各天皇の諱や系譜記事は『増鏡』からの抜き書きと言える内容にとどまり、特に珍しいとは言えない。たとえば、土御門帝について「諱為仁／御母能圓法印女内大臣通親女トナル／承明門院在子」と記されるのは、『増鏡』の「いまの御門の御いみなは為仁と申き。御母は能圓法印といふ人のむすめ、(中略) 後には、内大臣通親の御子になり給て、末には承明門院ときこゆ」(第一 おどろの下)二五四頁)に一致している。後高倉院に「三の宮」と注されるのは、『増鏡』の誤認をそのま

るといふ意味、世継三書などで既述された世継の続編の意味などが想定できるけれども、明らかでない。なお、「後世継」をこの作品の題名と見なして、外題に書かれた「弥世継」という書名はこの「後」を「弥」と読み誤ったものとする見解があるが、この「後世継」を題名と考えることはできない。この「世継」は書名ではなく、系図・系譜である。このような系図を基軸にして形成された物語作品を「世継(の)物語」と呼ぶことは不自然ではない。その意味で、『増鏡』にも世継の物語の要素が認められる。高山本の貼紙は、『増鏡』の世継的性格が認定された結果なのかもしれない。また、近世に、『増鏡』が「弥世継」と見なされた可能性を示すものかもしれない。

まに踏襲したものである。ただし、右の系図の「二条帝」と「六条帝」は『増鏡』にまったく記されていない。後白河帝と高倉帝との間の二代であるので、系図作成上または皇位継承史形成上は必要かもしれないが、『増鏡』に付された補注の内容としては相応しいとは言えない。しかし、もう一ヶ所『増鏡』に見えない部分「後世継」に着目するとこの二代の意味がやや分明になるように思われる。

「後世継」は書名とは考えられない。「後鳥羽院」の上部に位置するようにも見えるが、後鳥羽院とその経歴との関係は見いだせない。おそらく、「後世継」は「後鳥羽院」の次の行であると判断すべきであろう。「世継」は系図や系譜を意味するので、以下に後白河から土御門までの系図を記す意図を明示するために「(後)世継」と大書したのである。「後」とは、一貫した大きな「世継」の後の部分に該当する

六 『弥世継』の多様性

散佚『弥世継』の実体については、推定できる材料が乏しいため、確定できるものはほとんどない。名称が固有名詞とは言い切れないため、必ずしも一義的に捉えられないかもしれない。同名異書が存在していた可能性もある。

しかし、『本朝書籍目録』の記載などに基づき、中世頃には、歴史物語としての『弥世継』二巻が確実に存在していたと考えられる。それは、『栄花物語』『大鏡』『今鏡』の世継三作に倣った、第四の世継物語として成立したと予想されるのである。この作品は詳細な王朝的な正当歴史物語が中世新時代の簡約な教育的歴史物語への移行する過程を体現していたと推定され、歴史物語史解明のためにきわめて重要であったと評価できるが、実体が確認できない。

百年以上を隔てて成立した『増鏡』は、作品世界の統一性と王朝的伝統の確保のために、当時存在していた多彩な歴史物語諸作品の系譜を再編成し、一直線状・直列型の鏡物系歴史物語系列を創造したと思われる。この段階で『弥世継』は、『今鏡』と『増鏡』の間を補填する作品と位置づけられ、正統歴史物語の加えられたが、同時に間隙を埋めるだけの小品と認識されるようになる。この認識は現在に継続している。

近世の『弥世継』は、二様に享受されるようになる。第一に、『増鏡』に築かれた正統歴史物語系列を墨守する享受方法が見いだせる。これは仮名文による日本通史の外観的完備に最大の価値を認めるもので、十語五章に典型的に現れており、ここに標題のみの『弥世継』が誕生した理由が潜在するのかもしれない。このように『弥世継』は尊重される一方で、内実が顧みられることが少なくなり、いつしか事実上散佚したと想像される。

近世には、『増鏡』の構想を受入れた上で『弥世継』の内容を享受しようとする流れも生まれていたと思われる。たとえば女性が日本通史の知識を平易に習得するのに最も適したのが歴史物語であったことは否定し難いであろう。したがって、『弥世継』が散佚すると、その内容を補うために『月のゆくへ』が著作される必要性が生じたと考えられるのである。

以上が、本稿で考察した『弥世継』の実態とその享受の過程である。半ば

以上は推定の域にとどまるが、歴史物語全史の展開とは整合し、歴史物語や世継の探究にある程度は寄与できるのではないかと思われる。

注

- (1) 拙稿「歴史物語の範囲と系列」(『島根大学教育学部紀要』第二十七巻 第一・二号、平成五年十二月、平成六年三月)。
- (2) 拙稿「歴史物語の語り手設定の継承と展開」(島根大学『社会福祉論集』第三号、平成二十二年三月) など参照。
- (3) 芳賀矢一「歴史物語」(『芳賀矢一遺著』昭和三年、富山房刊。一・二頁)、沼澤龍雄「歴史物語の本質」(『国語と国文学』第四巻第四号、昭和二年四月)、同「歴史物語」(『日本文学大辞典』第七巻、昭和九年、新潮社刊)、同「歴史物語の研究」(『日本文学講座』第三巻、昭和九年、改造社刊)、岡一男「歴史物語」(『日本文学講座』第二巻「古代の文学後期」、昭和二十五年、河出書房刊)、同「歴史物語」(『講座日本文学』第四巻「中古編Ⅱ」、昭和四十三年、三省堂刊。岡の二編は同著『古典逍遙—文芸学試論—』昭和四十六年、笠間書院刊)に再録)、石川徹「歴史物語の発展とその史的地位」(『国文学解釈と鑑賞』第十五巻第五号、昭和二十五年五月。同著『平安時代物語文学論』昭和五十四年、笠間書院刊)に再録)、松村博司著『歴史物語改訂版』(昭和五十四年、塙書房刊)、河北騰「歴史物語研究史」(歴史物語講座第一巻「総論編」平成十年、風間書房刊)、竹鼻績「歴史物語」(『日本古典文学大事典』平成十年、明治書院刊)など。
- (4) 拙稿「『秋津島物語』の輪郭—「歴史物語の範囲と系列」補説—」(『国語教育論叢』第四号、平成六年二月) 参照。
- (5) 同じ理由で、純正歴史物語と言うべき本質をもつ『六代勝事記』『五代帝王物語』『保暦間記』『梅松論』『神明鏡』などは正統なものと扱われることはない。『秋津島物語』から『増鏡』へと続く日本通史の一系列に組み入れられないからである。松村博司「歴史物語」(『日本古典文学大辞典』第六巻、昭和六十年、岩波書店刊)には、『五代帝王物語』『六代勝事記』『梅松論』などに「歴史物語的な一面」を認めながら

も、それらよりも『秋津島物語』『月のゆくへ』『池の藻屑』が優先されて取り上げられている。

- (6) 福長進著『歴史物語の創造』(平成二十三年、笠間書院刊) 七・八頁。
- (7) 拙稿「中世における歴史叙述と通史教育」(『日本文学』第四十六巻第七号、平成九年七月) など参照。
- (8) 『増鏡』本文の引用は、時枝誠記・木藤才蔵校注「増鏡」(『神皇正統記・増鏡』日本古典文学大系87、昭和四十年、岩波書店刊) による。
- (9) たとえば、松村博司「歴史物語」(『日本古典文学大辞典』第六巻、昭和六十年、岩波書店刊) には、歴史物語の主要作品として「『采花物語』『大鏡』『水鏡』『今鏡』『増鏡』」などがあり、(中略) 以上の五作品が、平安朝の物語の形式を基本として書かれ、歴史物語の主流となるものであるが、このほかに、『秋津島物語』(作者未詳。建保六年(一一二八)自序)、『月の行衛』『池の藻屑』(以上二書は、江戸時代、荒木田麗女(作)などがあり、以上のすべての作品を合せると、次のように神代から江戸時代の初めまで、帝王の系譜に従った和文の歴史ができあがる。／『秋津島物語』(神代) ↓『水鏡』(神武―仁明) ↓『大鏡』(文徳―後一条) ↓『采花物語』(宇多―堀河) ↓『今鏡』(後一条―高倉) ↓『弥世継』(散逸)、『月の行衛』が補う。高倉・安德) ↓『増鏡』(後鳥羽―後醍醐) ↓『池の藻屑』(後醍醐―後陽成)。」とまず八作品が代表作として示されて、その次に付加的に『五代帝王物語』『六代勝事記』『梅松論』が挙げられている。
- (10) 拙稿「『月のゆくへ』の輪郭―粹物語形式の継承と変容―」(『島大國文』第三十三号、平成二十三年三月) 参照。
- (11) 岩橋小弥太「世継考」(同著『上代史籍の研究第二集』昭和三十三年、吉川弘文館刊)。
- (12) 『今鏡』本文の引用は、竹鼻績著『今鏡』(上) (『講談社学術文庫、昭和五十九年、講談社刊) による。
- (13) 加納重文「歴史物語の性格」(『国文学解釈と鑑賞』第五十四巻第三号、平成元年三月。同著『歴史物語の思想』へ平成四年、京都女子大学刊) に再録。
- (14) 石川徹「歴史物語の発展とその史的地位」(『国文学解釈と鑑賞』第十五巻第五号、昭和二十五年五月。同著『平安時代物語文学論』昭和五十四年、笠間書院刊) に再録)、岩橋小弥太前掲論文(11) など。
- (15) 和田英松著『本朝書籍目録考証』(昭和十一年、明治書院刊)、六一二頁。なお、和田は「この書は今伝はらねど、大鏡、今鏡などにならひて、序文をそへ、今鏡、増鏡の如く、篇名を附したるものなるべく」と純粋な鏡物と見なしている(同頁)。
- (16) 拙稿「増鏡」と隠岐」(『山陰地域研究(伝統文化)』第八号、平成四年三月) など参照。
- (17) 拙稿「歴史物語の系譜と『増鏡』―継承性と自律性の観点から―」(『島大國文』第二十号、平成三年十二月) 参照。
- (18) (4) に同じ。
- (19) (16) に同じ。
- (20) 国文学研究資料館の「和古書目録データ」には、『今鏡』の写刊本六十八点が収められるが、そのうち四十五点の書名が「続世継」である。同館の「日本古典籍総合目録」の『今鏡』(国書所在) 欄に掲載される四十点程度の写本の過半数が「続世継(しよくよつぎ)」の標題をもつ。
- (21) 弓削繁校注『六代勝事記・五代帝王物語』(中世の文学、平成十二年、三弥井書店刊。一〇一頁)。
- (22) 『増鏡』にはわずかに世継と呼ばれた可能性があるが、例外的な現象であって、他の三作と同列に扱うことはできない。これについては後述する。
- (23) 前掲拙稿(2)。
- (24) (2) に同じ。
- (25) 前掲拙稿(7) 参照。
- (26) 山口康助「今鏡作者攷」(『国語と国文学』第二十九巻第六号、昭和二十七年六月)、太田晶二郎「『桑華書志』所載『古蹟歌書目録』―『今鏡』著者問題の一徴証など―」(『日本学士院紀要』第十二巻第三号、昭和二十九年十一月、『太田晶二郎著作集第二冊』へ平成三年、吉

- 川弘文館刊)に再録)、加納重文著『歴史物語の思想』(前掲)など参照。海野泰男「今鏡研究の動向」(『今鏡』歴史物語講座第四巻、平成九年風間書房刊)では、ほぼ寂超説が定説になったと説明される。
- (27) 五味文彦「歴史物語への志向」(山中裕編『王朝歴史物語の世界』平成三年、吉川弘文館刊)には、『今鏡』の為経作者説を起点に、『栄花物語』続編を兄の為業が、『大鏡』を父為忠が著作したという推論が展開され、『弥世継』作者の隆信を含んだ「歴史物語の家」の形成にまで論が及んでいる。このような見解が認められれば、隆信が著者であった可能性も無視できないが、現段階では、『弥世継』を隆信が著したことを前提に論を進めるには至らないであろう。『増鏡』序文の作為性・虚構性を考慮に入れると、隆信作者説も疑わしいと言えよう。
- (28) 『日本随筆大成』第一期10、昭和五十年、吉川弘文館刊。一三二頁。
- (29) 「弥世継」についての「割注」と「増鏡」の二文字が脱落したものと予想するのである。
- (30) 『秋斎問語』巻之四。『日本随筆全集』第十四巻、昭和三年、国民図書刊。六二頁。
- (31) 「是十語五草とて嫁入の具なり集棚にかざるなり」(多田義俊「秋斎問語」巻之四(前掲)。六二頁)。
- (32) 『月のゆくへ』の本文の引用は、野村宗朔「月のゆくへ」(『校註日本文学大系』第十三巻、大正十五年、国民図書刊)による。
- (33) また、淡海野台(野村東臈)撰の「荒木田氏月之由久閉序」(安永八年へ一七七九)には「其書始_リ于仁安_ニ終_リ于元暦_ニ、記_ス高倉安徳_ニ二帝時事_ヲ也。蓋諸鏡諸語、今世具存_ニ。而独_リ二帝紀伝散逸不_レ見_ユ」(前掲書へ32、二頁)とあり、高倉・安徳二帝を収める歴史物語の散逸が嘆かれている。
- (34) (10)に同じ。
- (35) 所蔵者整理番号「物語部五四号」(荏野文庫旧蔵)。本文の書写年代は江戸期と思われるが、書入・貼紙・表紙については不明。
- (36) 国文学研究資料館のデータベース「日本古典籍総合目録」には、藤原

- 隆信作の歴史物語として「弥世継(いやよつぎ)」が掲載されるが、「国書所在」に該当がなく、散佚作品であることが確認できる。同「マイクロ/デジタル資料和古書所蔵目録」には「記載書名」に「弥世継」とある一本が検索でき(高山郷土館所蔵の一本)、正式な「統一書名」が「増鏡」であることも確認できる。
- (37) 岡一男「歴史物語」(『日本文学講座』第二巻「古代の文学後期」、昭和二十五年、河出書房刊。同著『古典逍遙―文学芸学試論―』昭和四十六年、笠間書院刊)に再録)など参照。
- (38) 折口信夫著『日本文学啓蒙』(昭和二十五年、朝日新聞社刊。全集第十二巻・二五五頁)など参照。
- (39) 国文学資料館・日本古典資料調査データベースの「文献資料カード」の補記に記される。

※本研究は、国文学研究資料館基幹研究「王朝文学の流布と継承」(二〇〇六～二〇一〇年度)の研究成果の一部であり、科学研究費助成事業(23520224基盤研究C「歴史物語の享受と継承の研究―古代・中世・近世歴史物語全作品の文学史的再編成」)の助成を受けたものである。

